

鳥羽絵（御名残押絵交張）

へしめたぞしめた オットどつこい 逃がしてなるか おのれ啗らば三味をかじらいで 戸棚めしつきあげくのはてにや 可愛い女房の鼻ばしら それで憎さが枳おとし ハツ／＼ハツクサメとこ万歳 見をれお蔭で風邪ひいたへほかに引くものは何である ちんり／＼ちんばに船かな棒 酒があとひく 女郎がお茶引く 夜鷹が眉ひく 畑じゃ大根 うつつい姉へのそでたもと 引く手あまたであるぞいなへはずみに南無三畜生め 摺古木とる間にへちゅいッと逃げた へみよう／＼みよう／＼／＼／＼ へねずみに起きて月見かな へあら怪しあやし／＼の十六文で 九官鳥は見たれども 摺古木に羽根が生えて 鳥羽絵はほんに我ながら 見るは始めて おや／＼／＼ へいでや捕らえて友九にと 足を伸ばしつ手を上げつ 捕らんとすればへ鳥はついと 飛んで逃げたへエ、あつたらものえ へ見送るうしろにへ逃げたるねずみ 振り向くとたんへ見つけてうぬと馳けよるを へそのまま膝に飛びついて へなぜそのように腹立てて わたしを何とさしつけにいうも恥ずかしそもやまた へ藁紙屑の巢をはなれ 流しの下や膳だなで いたずら習うた時分から へふつと心で思い染め 猫やいたちの目を忍び どうぞ抱かれてねずみとはへ及ばぬ恋の身の願ひ へ知らぬお前の木枕を せめて啗つて念ばらしへそれに聞こえぬ胴欲と山椒のような目に涙 鳴いて喰いつきかこつにぞ

へエ、畜生め

へかわいお方のお声はせいであがるお客の面憎や 悪洒落金びらいき過ぎた 蕎麦や按摩の声ばかり へそのほかおでんに正月や 割竹金棒火の用心 夜明がらすの四ツ手箆駕 へホイへ駕箆 へのかけ声に 旦那はなかで空寝入り おつこつた これには困り入りやした へそこらでどつこい引いて来る あたまの黒いどぶねずみ へ枳でおさえりや へチュウ／＼／＼ へちゅちゅらのちゅいと跳ね返し 鳥羽絵のごむりやごもつともと 地口で逃げる大ねずみの あとを慕うて走り行く。